

京都にて第2回 CIF ジャパン講演会を開催 『外国での学びと国際交流』

2012年11月25日、晩秋の京都（京都府国際センター）にて前年に次いで2回目の講演会を開催しました。前回は東京での講演会同様、社会福祉学関連のテーマでしたが、今回は米国留学の後、現地で地域との関わりを求めてコミュニティ・ガーデンづくりのボランティアを経験された建築家と、イタリア生まれで英国や日本での経験の長い国際政治学専攻の若い先生に講演をお願いしました。久しく日本人の国際化が問題視されていますが、参会者には講師の話から考えるヒントがいくらかひらめいたのではないかと思います。参加者への事後アンケートから、「いい会だと思いました。雰囲気があったかくてなごみました。意識が高くて居心地がよかったです」（女性・40代・京都府・医療関係）、「今回のようにグローバルな場において活躍する人の話をもっと聞きたい」（男性・30代・京都府・教育関係）等のご感想を頂いています。当日ご参会頂けなかった皆さんの為に、講演と質疑応答の内容をご紹介します。



講演(1)

「アメリカでの市民ボランティア体験を語る」

山田真也氏は、1972年京都市生まれ。京都大学工学部卒業後に渡米され、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校大学院にて建築修士号取得後、現地の建築設計事務所に勤務されました。2010年京都にてヤマダ・アーキテクチャを設立し、活動中です。

ヤマダ・アーキテクチャ代表 山田 真也

今日はCIFジャパンの講演会にお招き頂き有り難う御座います。これから私のカリフォルニアでの市民ボランティア体験を通じて、外国人として自分の住む社会にどう関わるかについてお話しをさせていただきます。

わたしが建築を志した契機は、イタリアに旅してローマのカラカラ浴場を見てとても感動したことです。これを築いた当時の人びとにつよい想いを致し、時代を超えて感動を与えるものに深い感慨を覚えた次第です。

米国留学はロータリー財団から奨学金をいただき、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校大学院に決めました。入学後の語学研修では、文法や語



外国の環境は自分を正直にするのであれば、外国は自己イメージを打ち壊すには格好の機会がえられる場ではないか、そして自分を越える仕事ができる場ではないだろうかという気がしております。

彙云々を気にする以前にもっと堂々と大きな声で話さなければ、そもそも相手にされない、と助言を受けたことを憶えています。

最初は講義の英語がさっぱり解せませんでした。日本語で一切話さないのが効を奏してか、また教授のリラックスした自由な姿勢が緊張を解いてくれて、次第に講義や英語に慣れていったように思います。

ロスアンゼルスは世界中からひとが集まっており、アジア人も多くエンターテイメントシティとも呼ばれています。そこでアメリカの建築と出会ったわけですが、大学院を修了した後は現地の設計事務所で働くことになり、種々の住宅設計を手掛けました。

仕事は順調でしたが何か物足りず、地域社会に一人の建築家として直接自分を役立てたいという気持ちが強くなってきました。そんな時に、たまたまあるパーティで同級生と再会し、彼と一緒にコミュニティ・ガーデンの再活性化プロジェクトに取り組むことになりました。このプロジェクトからも収入を得られれば理想的でしたが、あくまで自分たちの余暇を使った奉仕活動として行いました。このボランティア活動の名称は「ユニオン通りコミュニティ・ガーデン・プロジェクト」と名付けられましたが、その地域は住民のほとんどがグアテマラやエルサルバドルなどからの移住

者が住み、経済的に貧困者の多いダウンタウンの一角でした。問題のガーデンというのは10年近く使われず放置されていたところから、地元のギャングの集会や麻薬取引の場となっていたようです。

この放置された場所をコミュニティ・ガーデンとして、住民の集まるコミュニケーションの場所、憩いの場所にしようと考えました。そこで、土地の境の鉄条網フェンスも取り払い、高さの低い木の優しい感じのものにして人たちが中を見られるようにしました。入り口には木のアーチやゲート、掲示板などをつくりました。憩いや集会、ヨガ教室など地域の人々のための空間としてパティオもつくりました。資材の調達は、まず私たちのクレジットカードで購入し、其の後に公共団体の助成金で立て替えた分を払ってもらいました。工事作業はすべてボランティアの手作業。建設機械は使えなかったため、穴掘りや柱建て作業は汗だくでした。地元の高校生、大学生、近所の住民の方、関係者の家族、友人、私たちの建築家の友人などとともに、ほぼ毎週土曜日には朝から晩まで、作業しました。およそ1年半を費やして完成にこぎ着けましたが、この間の問題点と言えば、ヴォランティア・チームの皆さんのモチベーションの持続であったと思います。そのためにはリーダーシップが肝心で、たとえ一時的に仲間が離れていってもリーダーが当初の目標に向かって進み続ければまた協力者が現れる、ということを経験しました。

完成の暁には開園式を催してもらい、市議員がやってきて挨拶してくれたり、近くの教会から神父さんが来て祝別までしてもらったりしました。おまけにロスアンゼルス市議会から予期せず賞状までいただいた次第です。近頃ではインターネットで見る限り、このガーデンは使用されていて評判が良いようで、現市長のお気に入りの場所となっているそうです。

今、振り返ると私は無我夢中でこのプロジェクトを楽しんでいただけのような気がします。地域社会を助けることに夢中になって、本当に自分のやりたい事から逃げていた所があったと思います。

その後は別の建築設計事務所に移り、北カリフォルニアの公共図書館の仕事を任せてもらえました。その公共図書館のプロジェクトの後、独立して仕事をすることにしました。

そのとき、アメリカでビジネスをするとして建築家として自分に何ができるか、いろいろ考え、実際に展示会に出向いて自分のアイデアを売り込みにまわったりもしました。やがてリーマンショックの煽りをうけて日本に戻りましたが、通算14年間のアメリカ生活からはいろいろ考えるところがあります。

そのなかで一本つながるのは、米国は自分にとって正直になりやすい環境であったということです。これは米国に限らず外国に滞在していると自分は容易に自分に正直になることができるということ、外国の環境は自分を正直にする、ということだと思います。ですから、自分が正直になるのであれば、外国は自己イメージを打ち壊すには格好の機会がえられる場ではないか、そして自分を越える仕事ができる場ではないだろうかという気がしております。みなさん、ご静聴有り難う御座いました。

講演 (2)

「日本での学びとさまざまな国際体験」

ジャンルカ・ボナンノ博士 (Dr. Gianluca Bonanno) は、1984年イタリア、ヴィチエンツァ生まれ。父上の仕事でロンドンにて育ち、ドイツ、アメリカ、中国に各国1年以上滞在した経験をおもちです。イタリアにて空手柔術古武道を学びデンマーク国際武術大錬士。2003年来日、警察武術指導員。立命館大学大学院国際関係研究科（国際関係学）修士及び博士。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（国際政治学）博士。現在、京都大学東南アジア研究所機関研究員として活動しておられます。

京都大学東南アジアセンター機関研究員 ジャンルカ・ボナンノ

ご紹介頂きましたが、ルカと呼んでください。今日は朝から1回目の英語による講演を終えて来まして、この後、夜に中国語の講演が控えています。

イタリアに生まれて3歳の時、父親の仕事でロンドンに行き11年間過ごしました。毎年2、3ヶ月は国に帰りましたが、国ではイタリア語、ロンドンでは英語とどちらにいても標準語を話すので、イタリアに帰っても、顔はイタリア人だけど外国人でしょ、とこどもの時から言われてきました。或る意味で恵まれた境遇であったと思います。高校に上がったからはドイツ、米国、中国にそれぞれ1年以上滞在し、2003年に国際警察の武術師範として2年間東京で過ごして、その時から日本に住みはじめました。

その後、立命館大学の国際関係学部に進みました。その頃学内で国際交流部を先生と相談のうえ作る事になりました。16ヶ国からの留学生が各国の文化を紹介することになり、集まったひとに少しでもなにか話をするか歌を唱って貰うことにしましたが、この活動は現在も続いています。



一般に開発途上の地域に暮らす人たちは外の世界を知らないの
で、自分の世界を他の世界と比べることができません。そこで、まず、
その人たちと話し合い、さまざまな提案をして現地の人たちに選択
肢を示してあげることが、自分の国際貢献であり、また国際交流で
あると考えています。

次に中国の内モンゴル自治区に5人のグループを組んで訪れ、教育関係
でなにか活動できないか訊ねた結果、英語を教えることになり、5年前か
ら以後毎年ボランティアとしていろんな国からの訪問が続いています。
内モンゴルでは牧場が広くまた遠くにあり、学校も多いけれど全部訪れる
のは無理なのでいくつかを選んで巡ることにしました。ウランバートルで
はローソクの灯で暮らしていて暗くなると風力発電でひとつの建物に電
気を供給し、そこにパソコンを買って貰って無線を用いて、こども達が学
校に通わなくても或る程度、先生の顔を見ながら勉強できるようになり
ました。

こんどはタイの学校でのことですが、或る小さな町の学校では周辺の村
から来ている学生達が多くいて化学を勉強しています。ところがその内容
が村の生活の現実からかけ離れていることに気が付きました。そこでな
にか繋がりを見出そうと考えた末、村の現地調査を行い、そこで村民が飲
み水に困っている状態を見たので、飲み水作りを始めました。これにはや
がて中央政府も援助を差し伸べてくれて1年8ヶ月かけて水が飲めるよ
うになりました。

英国、米国など豊かな国に住みましたが、貧しいという語弊があり
ますが、わたしは貧しい開発途上の地域で働きたいと思いました。次に写
真でお見せするのはミャンマーと中国の国境付近ですが、現地では中国人
が観光客として多く訪れていて遊びや買い物をしたいと思っているわけ
です。問題としては、そのことがミャンマーの人たちによく分かっていな
いので、唯お金を得るためには何かをすればよいと思っているんです。当

時わたしは日本政府から派遣されて現地に行きましたが、アンケート調査を中国人の観光客に行いま
してその結果をミャンマーの人たちに知らせ、また観光客に時間をもらってミャンマーのNGOやN
POの関係者に会って話を聴いてもらいました。そうして現地の人びとにもようやく理解ができるよ
うになり、文化ビレッジを作ろうということになり、2年前にようやく出来上がり、そこでミャンマ
ーの少数民族を紹介したところ成功でした。

一般に開発途上の地域に暮らす人たちは外の世界を知らないの
で、自分の世界を他の世界と比べることができないのです。こうしたことから、私としては現地に行って、自分の努力で現地の人たちに
選択肢を示してあげることが、自分の国際貢献であり、また国際交流であると考えています。

参加者からの質問と回答

(GB: ボナンノ博士の略)、(敬称略)

【質問】山田さんにお伺いしますが、アメリカ
人が自己責任において一生懸命働いて過労死に
なるというお話が印象に残りましたが、他の国
では問題になっていないのでしょうか。

山田: 大きくは取り上げられていないのですが、ア
メリカにはアメリカン・ドリームがあって、それは
「起業」することですが、現状としてけっこう健康
を害したり自殺したりする人も多いと思います。雇
用者(事業主)は特にそうですが、反対に雇用され

ている人たちは契約以上のことを考えず、労働市場をみて気に入らないうと辞めていくという風です。

司会：日本人の働き過ぎについてジャンルカさんはどう見ておられますか。

GB：いい質問ですね（笑）。印象ですが、日本では時間が大事にされていると思います。向こうでは仕事によって1時間で終わればそれでいいという風に考えます。根本的にはどちらもよく働くと言うことは言えるでしょうね。社会的な背景も考えてみて、たとえば家庭での過ごし方など、教育の問題でもあるように思いますが。

【質問】ジャンルカさんに、日本人の外国の大学への留学が少なくなっていることについて、日本の将来が気掛かりなのですが、お考えをお聞かせください。

GB：わたしもそのような心配もっています。日本政府は逆に外国からの留学生の受入れ対策をしていますが、そうではなくて、やはり日本人が自分の眼で世界を見て、自国と違うところを持ち帰って帰国後の日常生活に活かせばよいと思います。外国から留学生を受け入れても、なかなか日本人が交流しようとしないので、結局あまり変わりません。

自分から興味と好奇心を持って、アマチュアでもいいから出かけていくことです。

山田：他の国に比して、相対的に日本はやはり国際交流で遅れをとるとおもいます。

【質問】わたしは京都の中学校で英語を教えています。毎日、文法や受験英語などで面白くなって、今日は外国に行っておられた方にいい考えでも教えて頂ければと思いますが、

教室に外国の方を招いてもみんな喋らないんですよ。

山田：米国の大学のESL（English as a Second Language の略）コースでよかったと思うのは黒人の先生がわたしに、英語で話すときは声を大きく、はっきり発声するように説いてくれたことでした。「声が小さい！」とよく叱られました。積極的に話せということですね。

GB：大人になってもシャイな（shy）ひとはシャイです。中国では40人の生徒と一緒に英語の歌を唱いました。なんとか英語で自分の国の文化を具体的に紹介できればよいと思います。

【質問】ジャンルカさんは母国のイタリア語、英語、独語、中国語、日本語を流暢に話されますが、幼児期ではなく、大人になってからの外国語習得の秘訣はなんでしょうか。

GB：一番いい方法というのはありませんが、とにかく興味を持つことだと思います。私の場合、日本語との出会いは8つの時に柔道を始めて、そこから日本語に興味を持ちました。まずは興味をもって中に入っていくことですね。

.....

（この他にも種々ご質問を戴きましたが、紙幅の都合により悪しからず省略させていただきます。）

お知らせ

World News Autumn 2012 が発行されています。

下記ホームページをご覧ください。

http://www.cifinternational.com/sites/www.cifinternational.com/files/cif-autumn-2012_final_3.pdf